史料室だより No. 17　東洋英和女学院史料室委員会
発　行　1982年11月6日

東洋英和幼稚園新園舎（昭和七年）の頃

長野静江氏（柿の木坂幼稚園主任）のお話

委員 ― 今日は、先生が東洋英和幼稚園で過ごされた頃のことをお伺いしたいと思ってまいりました。よろしくお願いいたします。

◇英和幼稚園に行くまで

長野 ― 私は昭和9年の4月1日から17年8月31日まで英和幼稚園におりました。麻布の新堀に住んでいてそこから英和に通いました。それまでの昭和6年10月から9年3月までは根岸の愛隣幼稚園に行っておりました。根岸は男子ミッションで根岸会館はバットさん、プライスさんが責任者でした。ここの夜学では会社勤めの方達が勉強しておりまして、長野彌院長先生がその時分講義にいらして下さいました。私は根岸の幼稚園の四階建の一階におりました。そこではクラブがありまして、青少年のための図書館や、テニスをする場所、お裁縫をするところが会館内にありました。会議があると英和の宣教師の先生が皆根岸に来られ、また根岸の宣教師の方たちが全部英和に行かれるという、根岸の男子ミッションと英和の女子ミッションとは始終会議がありました。このような関係があって、当時の英和幼稚園の主任でした福島先生は、よく土曜日のお休みに見えました。この頃に、福島先生より英和の幼稚園にこないかといわれまして、それで行くことになりました。私はそれまでも根岸から師範科を教えに通っておりました。老朽した英和幼稚園の建物がこわされて元の東光会の場所に新築されることで、古い幼稚園の道具は全部屑屋にやるということを聞

新　園　舎

いて勿体ないと思い、子ども達のクレヨンを入れる引出し、蓄音機の台、折り紙を入れる教材用の戸棚などトラックに積んで、私も乗って根岸に運びました。そして今度は新しい英和幼稚園に行くことになったのです。

◇新園舎の園庭のこと

長野 ― 来てみましたら、これは幼稚園の見本と言ったらいいんでしょうか。あんまり小じんまりとして、子ども達のためより見るための建物ですね。そういう風に見受けられたんです。何故っていいますと、幼稚園の玄関は階段で、それはまあいいとしましても、宣教師館まで行く間のテラスの真中から庭の真中に細長い池があったんです。そして池の周りは土ではなく、小さい三角のような形に尖ったところのある石がぎっしりだったんですね。その池は大変見た目にはよく、庭の真中にありますけれども、何といっても小さい子どもは駆けますのに、この庭に出てきましてもまず池

の周りを廻るぐらいで、あとは遊ぶ場所がないんですね。青楓寮と宣教師館のお庭というのは昔の鍋島さんのお邸のあとですから、池になった所に大きな岩があったり、水はありませんが池の中に大きな石が敷いてあるのが残ってます。それで山の方に大石内蔵助の何かの桜の木などがあって見るための庭なんです。それでもそこを上ったり下りたりできればいいと思ってそれを使いました。

子ども達は玄関からお家へ入ろうとする時も、どうしても駆けます。向うから勢よく駆けて来たり、向うをむいている子ども達は、お家に入りましょうなんて言って、くるっと向いた瞬間に目の前が池で皆飛び込むんです。まあほんとによく飛び込みましてね。その時分はウールじゃなくてセルといいまして、セルの坊っちゃんの着物、お嬢さんの着物、下着、それだけは用意いたしました。飛び込むとみな脱がせてそのセルを着せるんです。それであんまり飛び込みますので防御策に大きな植木鉢を両側に置いてみましたけど、今度は植木鉢ごと入っちゃうんです。ほんとに誰の設計でしょうと福島さんと湯浅さんと私の三人でよく話合ったものでした。ある時はミス・レーマンまで落っこっちゃいました。なにしろ敷石と池との距離が短かいんです。池の方が長いので必ず落ちる状態になるんです。冬になると氷が張ります。 池の淵が平らですから氷は足で撫でられ池に入れるんです。 割りたくなったりして、 またドシャンと落ちるんですね。春はお隣のお家から大きな立派な八重桜が伸びていて、あれは長いこと観察不十分で幼稚園の桜だと思っていたんです。何しろ枝は全部幼稚園の方ですからその花びらが又池に一杯になります。すると子ども達はさわりたいんです。そして子どもの胸が池の淵に当たりシーソーのようになり、バランスを崩してジャボンと入ってしまいました。夏になると池の水をかえるために金魚をあげて、小使いさんに池の底を洗ってもらう。そういう時には大っぴらに子ども達に、

まゝごとの部屋

「お入りなさい」と言って遊ばせました。あとは庭というような場所ではなかったんです。この池は私がいる頃ずっとありました。戦争中は池の水を道に撒いて焼夷弾を防ぎました。池の深さはミス・レーマンが落ちれば膝まででした。怪我はしないんですが、ただ濡れちゃうんです。それからお庭にちょっと屋根があって、テラスの続きにお砂場があったんですけれども、ちゃんと箱にお砂が入っていて子ども達は立って砂遊びをするんです。足ごと入ってじゃないんです。誠にお淑やかにしなければなりませんでした。

◇先生方と保育のこと

長野 ― その頃はミス・レーマン、ミス・ステーブルス、ミス・スクルトンがいらしてましたが、殆どの責任はミス・レーマンがお持ちでした。ミス・ドレイクは私が行きました時には静岡にいらしたと思います。

幼稚園は二階建でしたから、子ども達の食事を二階でお母さま方が作ったり、浦口さんが栄養士としての責任を持って下さいまして献立をたてて下さいました。そして二階の一部屋はお母さま方や付添いの人達が待っている場所にしました。下の幼稚園には、まゝごとをする畳の部屋があって、三畳位ありましたでしょうか、そこでは水を使え

るようにお流しもありました。お人形さんがねるお布団などいろんなものがあったんです。あと三つの部屋のうち一つは、大工道具だけが置いてあり、四人位子どもが入るともう満員でした。

玄関から靴をぬいで入りますと、中にはコート掛けが一つずつあって、そこにコートを入れるとドアを締めても通風がいいように、がらり扉で透かしてあって、それが一つの特徴かと思いますがそういう所でした。

実習生たちは木綿のスモックを上に着ました。それがオレンジ、赤、緑、青、黄といったようにチェックの模様で、これは子ども達がよくわかるからというミス・レーマンの発想でした。

三年保育が幾人かおりまして、幼稚園の真中のホールと他の部屋から離れた玄関に近い方の部屋で保育しました。

ミス・レーマンの時にはよく礼拝をしました。椅子を丸くおいて坐り礼拝をしてから、歌ったり、お話を聞いたり、リズムをしたりということを一日に必ずどの時間かにやりました。その司会は福島先生と私の二人でしました。湯浅さんにはいつもピアノを弾いてもらいました。ミス・レーマンはまめな先生でよく幼稚園にいらっしゃいました。

私は英和の師範科に寄って師範科の生徒たちと礼拝をしてそれから幼稚園に来るんです。幼稚園が済むと又師範科に寄って家へ帰りますから、ミス・レーマンに会うことが多いんですね。学校で会いますと「今日の幼稚園での司会はどなたですか」とおっしゃるので「私です」と言いますと、「それじゃ行きます」とおっしゃるんです。こちらは気の張ることでした。まずいらっしゃるとピースの楽譜をピアノの上に沢山置いて、私が司会をしているのをちゃんと聞いていらっしゃる。私が「今日はお天気ですね」といいますとさっと楽譜を見てお天気の曲の何かを出そうとなさる。「今日はお庭でどういうことがあって」とか、「お池に何があって」というとすぐ曲をお探しになる。それでこちらも今度何を言いましょうか、ミス・レーマンは何を出すかしらと緊張するのです。そして私が「それではここで遊びましょう」と言うと、スキップか、歩くのか、駆けるのかっていう顔をして私をみていらっしゃいますから、「それじゃあ、今日はスキップにしましょうか」と言いますとすぐスキップの曲を弾いて下さるんです。そんなですから司会はとても緊張しました。幼稚園が済むと一日の保育の状態について十分でも五分でも話合う習慣がありました。この時に私がホールにいて、廊下の方の子ども達やお部屋の子ども達について、ミス・レーマンが「あなたはホールにいて、玄関の廊下にいた子ども達は何をしていたかご存じですか」とお聞きになる。「私はホールにいましたのでわかりません」と言いますと、「それは大変に怠慢な保育者だ。あなたはどこにいてもこの幼稚園の子ども達のことを全部知っているべきだ。『うしろにいたから知りません』これは駄目です。」ですから大いに緊張しました。そのお蔭でこの柿の木坂でも今どの子が何をしているかが、やっぱり眼で見なくても感じるんですね、これは習慣だと思います。

ミス・ドレイクの時は違いました。ミス・ドレイクという方は、いつも坐ってにこにこ笑顔でいらして、全く自由にこちらで何でも楽にできる状態でした。

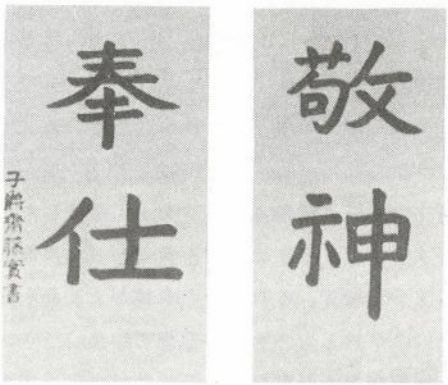
前にも言ったように庭が使えなかったものです

園長をなさった先生方　左より
ミス・ハミルトン　ミス・レーマン　ミス・ステーブルス

「敬神・奉仕」の額の由来

長野　彌（元東洋英和女学院長）

東洋英和女学校の新校舎（現高等部校舎）が昭和八年に落成し、翌九年は学校の創立五十周年に当った。その当時前首相であった斎藤實子爵（五十年史の377頁に斎藤實子と誌されているがこれは女性でなく子爵の略）が春子夫人（英和の初期の卒業生）のご縁で五十周年記念式に列席祝辞を述べて下さいました。その折にお願いしてマーガレット・クレーグ記念講堂の両側のために「敬神」と「奉仕」の二面と、廊下に「敬神奉仕」と横書きにしていただきました。



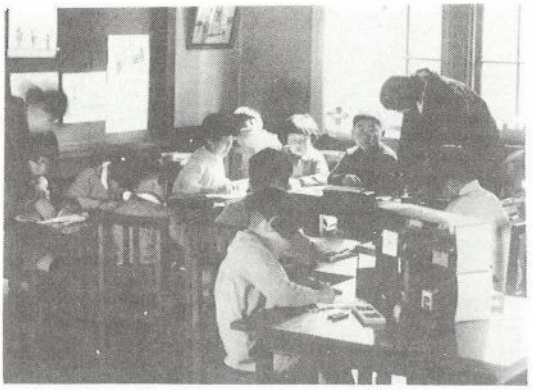
校訓制定（昭3）
"楓園史"より転載

から、よく私は年少組の子ども達を（福島先生は年長組）連れて「今日はお庭に行きましょう」と言って、当時は車も通りませんから三河台から鳥居坂の真中を堂々と通って石橋さんのお家に行きました。今の石橋さんのご親戚ですが、そこは広い庭で芝生もあまり刈ってなくて草原のようになっていて、向うに海が見え船も見えるんです。クローバーが咲いていてとてもきれいなんです。そして真中に辛夷の木が一本あって春はきれいな花が咲いているそこで飛び廻りました。お茶室がありましてその傍に細い竹が生えていて、竹の子が一杯でます。そこで竹の子を観察して、お弁当を食べた時もありました。一日遊んで帰る石橋さんのお家の庭は、幼稚園の延長でした。帰りの道で小学部の樫村先生とよく出合いました。「また、放浪の旅ですか」っておっしゃるので、「はいそうです、ジプシーでございます」などと言いました。これは石橋さんだけでありませんで、鳥居坂を上って右の方へずっと行きますと、浅野さんのお家があるんです。二人のお子さんは幼稚園を卒業していらっしゃいましたが、この浅野さんへも行きました。浅野家のお爺様方がご覧になる庭というのは細い松葉が庭の石灯籠の間や石の上にきれいに敷いてあるんです。そこへは行きませんが、お子さんが遊べるようにというお庭にはブランコがあったり、芝生になっていましたから、そこをお借りしてさんざん遊びました。もう心得てて下さいまして書生さんみたいな方が、ブランコの世話や、「じゃあ、さよなら、又どうぞ」と言って門を開けてくれました。自分の家の庭のように思う位にして帰ってくるんです。お天気の日は殆ど石橋家と浅野家のお庭に行きました。そんな幼稚園時代だったんです。ですから英和にいました時には、どうやって子ども達を十分に遊ばせるかそういう計画ばかり考えました。

その頃幼稚園ではウィーヴィングなんてことをしたんです。紙に切れ目があってそれを一つずつ拾って編んでいくんです。あれはどうしたって大人の技術を要しますでしょ。一つ間違えたら編めないんですね。あれをする時にどの子どもも皆手

が震えるんです。そしてあれをやっている途中に涙が出てきます。子ども達は喜んでするはずだと思うんですけれども、これはやるべきじゃないと、その時は思ってました。

それから折紙を使ったものです。それは和紙の上等なものだったんです。上等な和紙というのは一遍折っても又拡げれば平らになる。何度でも破れないで出来るというのが特徴なんですね。それをやったわけです。ところがそれは、私が絵の勉強で二科の研究所に行っていました時に、大人でも先生の絵をみてその通りに描くなんてとんでもないこと、人間は一人ずつ違うので違う発表がある筈なので、勿論勉強のためには違うものを沢山吸収しなければならないけれども、その一人ずつの違いがあるから研究所で私は何も教わったことがないんですね。ただデッサンの時は大変きびしいのです。一つのものを見るのにも角度が違うように、とにかく一人ずつは違うんだということを叩き込まれていますから、あんなことが子どもに何で必要かという事を疑問に思うようになったんです。そしてあとの時代に幼児教育ということは一という外国からのいろいろな知識が来た時に、あゝやっぱりそうだと世の中のことがわかるようになったんですけれども、その時分はわからないわけなんですね。やっぱり大人の眼で見て大変良ければそれが良いことだと、子どもの立場じゃないんですね。こういうことがあったものですから、



自　由　製　作

ウィーヴィングをやめようじゃないかと言ってやめました。それから色紙については、丁度キュックリッヒ先生がいらっしゃいまして、先生はドイツの方ですから、「この幼稚園には沢山のきれいな紙があって幸せですね。私の国では色のついた紙は殆どありません。」キュックリッヒ先生のお若い時にドイツでは戦争がありましたから、地下室のキャバレーのような所で残っている子どもを集めて幼稚園をして、地下室より出てすぐ帰った時に、市街戦があって何人か亡くなっているんですね。そういう経験をなさっていますので、ここではきれいな紙があってよろしいとおっしゃったのです。また紙屑籠をみて、「こういう紙はドイツの国では子ども達が大事にします。決して捨てません。」その日から私は未だに切った紙屑を子ども達に捨てさせません。切ったあとの紙は箱に入れておくとあとから装飾に使えます。ほんとうに使えないものだけ捨てる。私はキュックリッヒ先生の言葉から、もう今まで五十年これを続けています。

◇二・二六事件

長野 ― 私のおりました時に二・二六事件がありました。当時私は鳥居坂を下りて十番を突っきって三の橋からずっと入った所に新堀って所がありまして、母と一緒に住んで居りました。その日は雪が一杯なので少し早く幼稚園に行かなきゃと思いました。それで鳥居坂を上って行ったんですけれども誰も通らないんです。こちらはラジオも聞いていないんです。今の幼稚園のある所は牧野さんのお宅だったんですが、その前を通ろうとしましたら、剣突鉄砲を持ったのが「こらっ！」って言うんでしょ。私はそんなに兵隊がいるなんて思いもかけませんからびっくりしましたら、「止まれっ！」って言うんです。「どこへ行くっ！」「そこの幼稚園へ行きます」って言うと、「早く行

けっ！」って睨んでいるんです。幼稚園へ行きましたら小使さんも門を開けないでいました。福島先生も湯浅さんもまだ見えていません。小さい門から入ってラヂオを聞くと、「市民は外に出ることはならない。家では壁とか戸の側にいないように、箪笥とか道具の側にいなさい」という放送です。それから幼稚園のお子さん全部の家へ電話をかけました。外交官や政府の要人のお孫さん達がきていましたから、「今日は来ないように」と言いました。小使さんは若い元気のいい青年だったので、「僕が見に行ってきます」と出て行って、「何だか大変です。道を歩いている人たちは皆兵隊です。普通の人は歩いていません。そして、空には『兵に告ぐ、今からでも遅くない。』と書いたアドバルーンが高く揚っています。」ということでした。福島先生は今日はもう帰りましょうとおっしゃったけれど、鳥居坂は剣突鉄砲で怖いから三河台から今の防衛庁の先の連隊までちょっと行ってみましょうといって出ました。あの時分は着物で足駄ですからすぐ雪がたまるんです。通りには、ぞろぞろ、ぞろぞろ鉄砲を逆さに担いだ反乱軍が皆兵営に戻されるところでした。そしてトラックには包帯をして血だらけの兵隊が一杯乗って、第一連隊とか第三連隊にどんどん帰ってくる。第一連隊の所まで来ましたら田舎の小父さんみたいな方が二十人位立っていて、女の人はどこにもいないんです。「ここにいれば見えるわね」なんて言って全く若気の至りで立っていたんです。トラックが着くと門番が出て来て、「武装解除」とか大きな声で言って皆それぞれ兵舎に行かせるんです。あとからあとから続いてくるうちに夕方になりました。怖いということと見たいというのが一緒になっていました。暗くなって帰ってからラヂオを聞いてびっくりしたんです。今このとしになってあゝ見ておいてよかった。あんな事は再び出合うことじゃないと思っています。ですから二月になって雪が積ると二・二六事件と英和幼稚園と英和幼稚園に通っていた頃の事を思い出します。

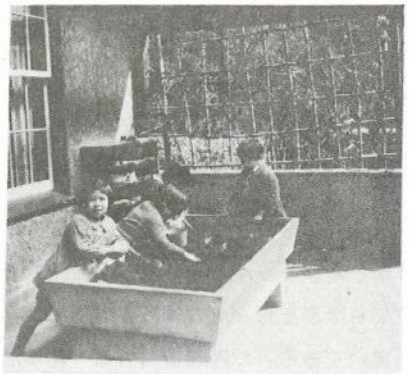
あの時に「敬神奉仕」をお書きになった斎藤實さんが亡くなって、幼稚園では高橋是清さんのお孫さんが、是清さんが亡くなる時に机の下か何かに入って見ていたんですね。それで幼稚園で絵を描く時、是清さんの葬儀の様子を、お坊さんだの「ここにおじいちゃまがねてる」ってお棺の絵なんか描くんですよ。だからすごい印象だったに違いないと思うんですね。

◇子どもたちのこと

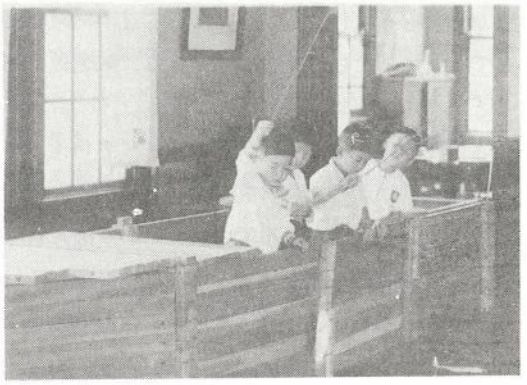
長野 ― 一昨年、あの幼稚園の建物を壊すという時にその時代のお子さん達が卒業以来初めてという顔合せでクラス会をしたんです。そしたら大事に卒業写真を持ってきた人がいるんです。それが一枚はお砂場の所に小野校長やら、ミス・レーマンやらと一緒に撮った写真で、もう一枚は宣教師館のお庭に面した方の出口のガラス戸の所で並んだ写真でした。皆が小さい時の写真の通りに並ぼうということになって写真を撮りました。

今でも私は一人の物を言わないツトムちゃんという坊っちゃんの絵のことについてだけは覚えているのです。そのツトムちゃんは自動車の絵を描きました。自動車をあらゆる角度から見たのを描くんです。ですが「ハイ」という返事以外は黙っているんです。私が「この自動車は今どこを走

池であそぶ



砂あそび



ヒル氏のつみきであそぶ

っているの」とこれだけいうと、黙って描きながら海になったり山になったり坂道になったりするんです。「あら、これは誰も乗っていないの」なんて言うとドアがちゃんと開いてお母様が乗る所だとかそれは見事なものになるんです。そして幼稚園に何年かいる間中自動車の絵ばかり描いていました。そういうことがあったものですからその後もお母様方や英和の師範科の人たちが「子どもが同じ絵を描いて困ります。どうしたらいいでしょう」と言った時には、いつでもツトムちゃんの例を話しています。

英和幼稚園には丸いテーブルがありました。これは四角いテーブルより見た目はいいのですが安定が悪いのです。子どもはどんなに「腰かけないのよ」と言ったって瞬間にやってしまいます。それで一人の坊ちゃんは座ってひっくり返り指をつぶしてしまいました。もう一つは窓の下に長い腰かけるような幅の所があったんです。そこは仕切られていて皆蓋になるんです。その中に毬やら本やら子ども達の遊び道具が入っていました。その蓋はきちっと落ちるため金具が回りについていました。重いんです。それをあげた時にきちっとバタンと落ちるんですね。それでいつでも何かありそうな気がして心配でしたが、こういう設計ですから仕方ありません。ある時一人のお嬢さんが蓋を開けた時、バタンと蓋が落ちて人差指が切れてぶらっと下ってしまいました。私は瞬間に血を脱脂綿に受けて、六本木の角の六本木病院（ゴトウ花店の向う側）まで駆けて連れて行きました。ここは外科ではなかったので、その後は幼稚園の責任ですから専門の外科に私が毎日幼稚園が終わると連れて治療に通いました。そのお子さんの指は治って、「その指でピアノを弾いています」とあとで手紙をもらい安心しました。その時いろいろ感じたものですから、何年か経ってこの柿の木坂幼稚園を設計する時、子どもの動きを考えて設計しました。それは英和での経験のおかげです。

◇ 師範科の授業

長野 ―戦争で私が英和幼稚園を辞めることになりましたが師範科だけにはしばらく通いました。その頃はモンペ姿で、青楓寮の二階に来て授業しましたね。青楓寮に寄る時、宣教師館にいらした酒井先生とお会いしました。西洋さん達は皆その時収容所になっている雙葉の学校に隔離されました。ミス・ハミルトン、ミス・コーテスなども……。酒井先生が差入れを持って行くから私にも行かないいかと誘われて行って、初めて「あゝ、こういう所にいらっしゃるのか」ということがわかりました。

戦時中の師範科では英字新聞を教材に使いました。日本の活字は非常に不揃いな線ですが、英字はいつでも直線と曲線の交わりだけですから字の

面がとてもきれいなんです。だから英字新聞を使ってそこに紙でも何でも貼ってそれで紙芝居を作るという事をしました。

古い建物の幼稚園では私達はミス・ドレイクから講義を受けたり、鳥居坂教会の日曜学校の建物の二階で講義があったんです。それから師範科は震災の時に長野へ避難しました。私は卒業していて長野にいまして、ミス・ドレイクより教えるように言われました。信州の空はきれいで、山や川に行って見た通り感じた通りに絵を描かせました。ですから英和の幼稚園に行っても車のタイヤを「円く描かなきゃいけないのよね」なんていう時でも「いいえ三角でも四角でもそのお子さんが描く腕の動きで現われればそれでよろしいの。」とそういうことで過しました。

私が師範科を教えていたのは、大正１２年４月から昭和４年３月までの間でしたが、その後中断して又昭和９年から行くことになるのです。長野にいた頃は裏にノルマンさんのお家があって、進徳館という青年たちが聖書を研究する所がありました。そこにミス・ドレイクや福島先生と泊っていました。そして長野師範の先生たちが師範科を教えていました。

私は英和の師範科を出て旭幼稚園に来た時に幼稚園の子どもは成長して小学生になるので幼稚園生でとどまる筈がない。小学校とのつながりを見るべきだということ。それで私は師範を何度も見に行きました。その時の師範にアメリカに８年間行った心理学の方がいらして、その方が師範の生徒を実習に使ってですけど、その先生が小学校１年から６年までの生徒八人位を持ち上りにして、朝の食事から夜の食事までの間は全部その先生が責任をもってする。その先生は朝ご飯を一緒に炊いて鶏や兎を飼ってその世話を子ども達がして一日の生活をする。それを聞いて私は一日見学に行きました。皆袋を担いで、すぐ傍の犀川につながるソバナ川というきれいな川に行って、川原の平らな砂の上に先生が棒で大きく「カワ、川」と書くんです。これが川だ。「スナ、砂」、「イシ、石」手で持ち川へ投げて「石」。大きい樹の根に皆坐り、樹の根にはいろいろな葉があり、蜘蛛がいたり虫がいます。それを見るんです。全部のその記録は膨大なものでした。六年間の記録は大変成功したと聞きました。その時その先生の教室に入ってなるほどと思ったのは、柱の所に漢字で「柱」と書いてある。お掃除道具も皆一緒の所にあって「叩き」「箒」、と字は実物で覚えさせる。又一つの教室で、ある所で数学をして、ある所では国語をして、ある所では絵を描いている。これが過去何十年も昔にされていたことなんです。私はなるほどと感じました。では幼稚園ではどうすべきかということ、師範科ではどうすべきかということ、だからこの実際のこと以外に教育はないと思ったんです。

◇ミス・ドレイクのこと

ミス・ドレイク

長野 ― ミス・ドレイクは師範のこうした教育についてとても関心をお持ちになっていました。指導力、包容力がおありの方でしたから、プログラム（カリキュラムのこと）を作る時は大変なきびしさがありました。私はこれはやめます、この折紙もやめますという風に皆破っていったわけですが、これを破ってちがうものをした時にミス・ド

レイクが賛成して下さったんです。言葉でおっしゃらないでいつでも頷かれるんですが、これでこちらも自信を持ちますよね。それが何十年経ってもミス・ドレイクのことはいつでも新しいでした。

ミス・ドレイクが夏に引退なさる時のお考えもいいと思いました。「私は少し耳が遠くなった」－それは少しだけでちっとも支障がないんですが－「でも私は会議をする時に耳が遠いと確実な把握ができない。これは自分の立場としたら大変よくないことで引退すべきだ。」とおっしゃって引退なさいました。その時寄せ書きをしまして、小さい紙にそれぞれの名前を書いてアルバムに貼りました。ミス・ドレイクのことは「ドレさん」と呼んでいましたが、よくレポートをお書かせになりました。レポートにはカザリン・ドレイクの頭文字「K・D」とサインして返ってきます。これは普通の出来で、少しいいと「Good K・D」　もっとすばらしければ「Very good K・D」とこれは採ったためしがない位、大抵「K・D」でした。ですから「KD大学」って言ったんですよ。それで師範科生たちに「K・D」とポスターカラーで書かせて三角の紙旗を沢山作りました。ミス・ドレイクと私は布を半分に分けて書きました。私はこれだけは宝ですから戦争中に疎開させました。旗には1936.7.18と年月日が記してあります。これに棒をつけてミス・ドレイクと私と一つずつ持って横浜港からお発ちになる時振りました。この旗は白いのでよく見えまして、ダグボートが先に行って大きい船体が後からゆっくり廻った時もう誰もデッキにいないのに、ミス・ドレイクは一人でこれを振っていらっしゃいました。人間は見えなくても旗だけ白く見えました。皆も私もいつまでも振っていました。

K・D大学の旗を掲げる長野静江先生

◇実習のこと

長野 ― 昭和4年9月から46年3月まで私は師範科で教え短大になりましてからも教えておりました。師範科時代の実習については、「今から手芸をします。」とか、「今から自由遊び」とか、そうすると何時でもそのクラスには三、四人ずつ実習生がついて行動しました。実習生は決まった期間で交代するんです。師範科の学生は全部東洋英和の幼稚園で実習したわけです。私が根岸の愛隣幼稚園にいた時（昭和6年10月～9年3月）も師範科の実習生はやはり根岸に来ました。ですからミス・ドレイクは始終いらしたわけですね。根岸に行く前（昭和4年9月～3年間）は安藤記念教会の幼稚園にいました時も、師範科の実習生は来ておりました。

◇寄宿舎での生活

長野 ― 寄宿舎で私は昔の建物の二階にいたんです。二階のつづきがミス・ブラックモアのお部屋だったんです。私の前が今、金谷ホテル夫人の内藤先生、そのお隣が酒井先生、その二階には青山の神学部に行ったり声楽をしていた小池久子さんなどそういう方達皆居たんです。不思議な学校ですねえ。卒業して方々に行ったりした人が皆寄宿に居たんです。それで私はそこから安藤（教会幼稚園）へ通っていたんですね。そうしたら山尾さんが火事になり、西洋の先生は今の国際文化会館が岩崎さんのお邸でしたから、あそこへ皆行って

おしまいになって誰も居ないんですよ。それで小学科の人たちが泣きながら「火事だけれど…」なんて廊下にいるでしょ。「あなたっ！　洋服着て早く下に降りなさいっ！　下の先生の言う通りっ！」なんて下に誰がいるかわかりませんけど怒鳴ってね。加茂先生が舎監で、消防署が来るでしょ。電話がくるでしょ。「もし、もし」なんて静かに仰有って「はい、私どもはお嬢さまの学校でございます。男の方はお入れできません。」て消防署が来て水をかけなきゃならない時に仰有るんですよ。それで門を閉めているものですから消防署が、「開けて下さいっ！、もし類焼したらどうしますっ！」なんて言っても絶対開けませんでしたよ。あれもひとつの貫祿ね。

山尾さんのお家の森が燃えたんですよ。そしてこちらは中学部の所に椎の樹があったでしょ　どんどん火の粉がきてもあれで助かりました。だから英和の校歌にある椎の樹は命の恩人です。この火事がいつだったか覚えていないのですけれども、私が安藤にいた頃だということは確かですから、昭和4年9月から3年間位の間の出来ごとです。

委員 ― 今日は長いお時間ほんとうにありがとうございました。

1982年2月18日　於　柿の木坂幼稚園

聞き手 ― 藤岡、芝原、加藤

採　録 ― 加藤　文　責 ― 藤岡、芝原

長野静江氏の略歴

大正12年　3月　東洋英和女学校幼稚園師範科卒業

大正12年　4月～昭和4年3月　旭幼稚園

昭和　4年　9月～6年9月　安藤幼稚園

昭和　6年10月～9年3月　愛隣幼稚園

昭和　9年　4月～17年8月　東洋英和女学校幼稚園

昭和17年　9月～現在　柿の木坂幼稚園

昭和　9年　4月～25年3月

東洋英和女学校幼稚園師範科教員

東洋英和女学院保育専攻部教員

昭和25年4月～30年9月　東洋英和女学院短期大学　担当科目　図画工作

昭和30年10月～46年3月　東洋英和女学院短期大学　非常勤講師　担当　図画工作・絵画製作

最近収集した資料から

○麻の花会（同窓会有志の集り）

麻の花会誌　大正8年春頃～昭和56年5月

大音楽会（昭和4年5月26日）のプログラム

於　帝国ホテル演芸場　主催　麻の花会

集会の写真　等

○小池久子様（ヒジ・コイケ）の舞台写真

○ミス・ハミルトンのバイブル・クラスの写真

○體錬大会順序（昭和18年10月28日）のプログラム　東洋永和女学校

訂正　前号（第16号）の5頁19行「桃太郎」の演出は今村先生ではなく樫村辯市先生でした。お詫びと訂正をさせていただきます。

あとがき　○〃「敬神・奉仕」の額の由来〃は朽木委員が長野彌先生にお尋ねし、書面でお答えいただきました中より標記の部分を載せさせていただきました。○今から五十年昔、昭和7年に東鳥居坂二番地に英和幼稚園の新園舎が新築されました。その当時の幼稚園のことを中心に長野静江先生に伺いましたお話を収録いたしました。写真の多くは英和幼稚園から拝借しました。

○麻の花会はじめ皆様から珍らしい資料をいただきました。感謝して御礼を申し上げます。

資料収集は続けております。ご協力を願います。

本年度の委員は、室長ー斉藤浩二　小学部ー張替　譲、竹井美智子、中・高部ー清野　礼、朽木久子、沓沢謙一郎、短大ー藤岡千枝子、芝原　翠の8名です。なお百年準備室の加藤閑子様が懇談会のテープ採録、文章おこしなどにご協力をいただいております。

本誌に関してのご意見やご希望がございましたらご遠慮なくお届け下さいますように、紙面をかりてお願いを申し上げます。

（短大　藤岡・芝原）